

ろう重複障害児・者の
コミュニケーションの実態と課題
—— 家族を対象としたアンケート調査から ——

甲 斐 更 紗・金 澤 貴 之・二 神 麗 子
吉 村 京 子・木 村 素 子

**A Questionnaire on Actual Conditions and Problems
of Communication of Deaf Persons with Multiple Disabilities:
From the Perspective of Their Families**

Sarasa KAI, Takayuki KANAZAWA, Reiko FUTAGAMI,
Kyoko YOSHIMURA and Motoko KIMURA

ろう重複障害児・者の コミュニケーションの実態と課題

—— 家族を対象としたアンケート調査から ——

甲 斐 更 紗¹⁾・金 澤 貴 之²⁾・二 神 麗 子¹⁾
吉 村 京 子³⁾・木 村 素 子²⁾

1) 群馬大学共同教育学部特別支援教育講座 (日本財団事業)

2) 群馬大学共同教育学部特別支援教育講座

3) (前) 社会福祉法人ゆずりは会

(2020年9月30日受理)

A Questionnaire on Actual Conditions and Problems of Communication of Deaf Persons with Multiple Disabilities: From the Perspective of Their Families

Sarasa KAI¹⁾, Takayuki KANAZAWA²⁾, Reiko FUTAGAMI¹⁾

Kyoko YOSHIMURA³⁾ and Motoko KIMURA²⁾

1) Department of Special Needs Education, Cooperative Faculty of Education,
Gunma University (The Nippon Foundation Project)

2) Department of Special Needs Education, Cooperative Faculty of Education, Gunma University

3) Social Welfare Juridical Person Yuzurihakai (previous workplace)

(Accepted on September 30th, 2020)

キーワード：ろう重複児・者 家族 コミュニケーション

1. 問題の所在と目的

聴覚障害にその他の障害を併せ有する「ろう重複障害児・者 (以下、ろう重複児・者)」は極めて個別性・専門性の高いコミュニケーションニーズを潜在的に有しているといわれている (金澤, 2013; 永石, 2007 など)。ろう重複児・者は、障害が重複していたり重度であったりすることに加え、聴覚障害があるために自らの思考言語の獲得や意思表示をするためのコミュニケーション手段の確立やコミュニケーション形成に大きな困難があるからである。そこで、一人ひとりの実態やニーズに応じながら有効

と考えられるコミュニケーション手段を複数選択して使いながらコミュニケーションを形成させる必要がある (松崎, 2017) とされている。そのためには、顕在化しにくい、ろう重複児・者のニーズを把握するためには、家族や支援者を通してその実態を把握することが不可欠である。

しかしながら、家族から子どもの様子を通してみた、ろう重複児・者の家庭、就労、障害福祉サービス事業などの利用、余暇活動 (イベントなどへの参加)、学校生活などにおけるコミュニケーションの実態についての調査研究は、金澤 (2008) が就学先のニーズについて検討している程度で、十分になさ

れてはいない。さらに、ろう重複児・者のコミュニケーション状況は生活・就労などの環境またはコミュニケーションの相手によって左右され、十分にコミュニケーション能力が活かしきれていない可能性がある。ろう重複児・者のコミュニケーション能力は障害名や診断名で把握できるものではなく、個々の様々な状況を理解しながらコミュニケーション能力を把握するとともに、コミュニケーション形成または発達を促進させるための手かがりを見い出せることで、コミュニケーション形成または発達に向けての支援ができるのではないだろうか。

そこで、本稿では、厚生労働省平成30年度障害者総合福祉推進事業として行われた実態調査（国立大学法人群馬大学，2019）の一部をもとに、ろう重複児・者の家族を対象とした、ろう重複児・者のコミュニケーションの実態把握のための質問紙調査から、家庭、就労やサービス利用（事業所・施設など）、友達と過ごす場やろう者コミュニティなどの場、そしてコミュニケーションの相手によるコミュニケーション形成の実態、コミュニケーション成立のために必要な手かがりなどについてさらなる検討を行い、彼らへのコミュニケーション支援のあり方を検討するための基礎資料を得ることとした。

2. 方法

(1) 調査対象

今回の調査では、各地域にあるろう重複障児・者家族会（以下、家族会）に所属している家族を対象とした。

(2) 調査手続きと調査時期

初めに、全国にある家族会団体28団体（2011年6月現在）の中から12団体を抽出した。12団体の家族会の各事務局に、2019年1月から2月にかけて、郵送で調査票を送付し、回収した。それぞれの家族会事務局を通じて、所属する会員（家族）に質問紙の配布をお願いし、記入していただいた。

(3) 調査内容と調査項目の作成

ろう重複児・者の障害状況などについては、永石（2007）による、ろう重複児・者の保護者に対する生活史究や、社会福祉法人埼玉聴覚障害者福祉会・全国ろう重複障害者施設連絡協議会（2013）などのろう重複児・者の専門施設における利用者や職員の状況調査で実施された質問項目をもとにして、今回の質問紙を作成した。さらに、コミュニケーション状況についての質問項目は、コミュニケーションは発信と受信から成り立つと考えたため、永石（2007）や社会福祉法人埼玉聴覚障害者福祉会・全国ろう重複障害者施設連絡協議会（2013）の調査でいられた質問項目や多川・吉田（2006）の日常的コミュニケーションに関する質問項目をもとにしつつ、発達の観点から作成した。

質問紙の項目は、①ろう重複児・者の障害種別や障害程度（障害者手帳の等級、障害支援区分・介護支援区分の状況）、②年齢、③年齢別の教育（療育）状況、④ろう重複児・者の現在の利用サービス¹⁾の内容、⑤ろう重複児・者のコミュニケーションが保障された事業・社会資源などの利用状況、⑥ろう重複児・者のイベントなどへの参加状況、⑦ろう重複児・者がそれぞれの場（「学校」「家庭」「事業所・職場など」「友達」「ろう者コミュニティ（ろう重複児・者同士の交流なども含む）」）で用いている受信・発信コミュニケーション手段（手話・筆談・キョードサイン [キョードスピーチ]・口話・触手話・身振り・絵カードや写真を見る・実物を見る）、⑧ろう重複児・者の各コミュニケーション手段（手話・口話・筆談・身振り・絵カードや写真の使用）におけるコミュニケーションの実態、⑨ろう重複児・者と他者との具体的なコミュニケーション状況（日常的報告におけるコミュニケーション状況を問う15項目、不満や要望の率直な表明におけるコミュニケーション状況を問う4項目）とコミュニケーションの相手、⑩日頃の暮らしの中での情報の入手やコミュニケーションにて困っていることや不自由していること、家族からのろう重複児・者へのコミュニケーション支援についての要望、ろう重複児・者との関わりにて日頃から感じていることや課

題、国などに対する要望や期待することの4項目から構成した。①から⑨は選択または記述式、⑩は自由記述形式で回答を求めた。

これらのうち、本稿では、⑤ろう重複児・者のコミュニケーションが保障された事業・社会資源などの利用状況、⑥ろう重複児・者のイベントなどへの参加状況、⑦ろう重複児・者がそれぞれの場にて用いている受信・発信コミュニケーション手段、⑨ろう重複児・者と他者との具体的なコミュニケーション状況の項目の結果を取り上げて家庭、就労やサービス利用（事業所・施設など）、友達と過ごす場やろう者コミュニティなどの場、そしてコミュニケーションの相手によるコミュニケーション形成の実態を検討することとした。

(4) 倫理的配慮

質問紙には、調査への回答は対象者の自由意志であり、回答を拒否した場合であっても不利益などは生じないこと、無記名の調査票であることを示すとともに、調査で得たデータの活用方法、回答は統計的に処理され個人が特定されるような形で公表されることはないことを明記した。また、質問紙の回答をもって調査に同意を得ることとする。

(5) 調査結果の集計及び分析方法

発送した質問紙300件のうち、回答は148名（回収率49.3%）から得られた。そのうち、有効回答である135件を対象とした。調査対象内容は原則として質問紙の設問ごとに集計を行い、必要に応じて回答比率を算出した。

3. 結果

(1) 対象者であるろう重複児・者の基本属性

0歳から19歳までのろう重複児は33名、19歳以上からのろう重複者は102名であった。聴覚障害の他に「知的障害」を併せ有するろう重複児・者が最も多く59名であった。また、聴覚障害と知的障害、他の障害（発達障害、内部障害、視覚障害、肢体不自由など）といった、聴覚障害と知的障害を含めて

3つ以上の障害を併せ有するろう重複児・者が40名であった。

ろう重複児・者のサービス利用の状況について、ろう重複児が最も多く利用しているサービスは「放課後等ディサービス」の10名であった。ろう重複者では、最も利用者数が多かったサービスは「生活介護」であった（46名）。利用しているサービスは主にどの障害に対応しているのかという視点で検討したところ、最も利用が多い「生活介護」においては、「生活介護（知的障害対応）」が29名、「生活介護（聴覚障害対応）」が28名であった。それぞれのサービス利用者の半数ほどが、音声言語でのやりとりが中心とされる知的障害に対応したサービスを選択して利用しているろう重複者が多いことが窺えた。一方で、「施設入所支援」、「共同生活援助」、「自立生活援助」では、聴覚障害に対応したサービスを利用しているろう重複者の存在がみられた。

また、一般就労しているろう重複者が2名であった。

(2) ろう重複児・者のコミュニケーションが保障された事業・社会資源などの利用やイベントなどへの参加状況

1) コミュニケーションが保障された事業・社会資源の利用状況（複数回答）

家族から捉えた場合の、ろう重複児・者が手話や文字通訳（要約筆記、全文入力、音声認識の活用など）のコミュニケーションが保障された事業・社会資源などの利用状況で、利用が最も多かったのは「ろう重複児・者が集まるサービス¹⁾ 事業所・施設など」（77名）であった。次いで多かったのは「特別支援学校（聴覚障害）／ろう学校」の利用であり、73名であった。「聴覚障害者団体や手話サークルなど」の利用が32名、「手話通訳者派遣」が23名、「視覚障害者情報提供施設¹⁾」の利用が6名、「盲ろう者向け通訳・介助員の派遣」の利用が4名、「その他」が8名、利用していないろう重複児・者は16名であった。このことから、「特別支援学校（聴覚障害）／ろう学校」や「聴覚障害者団体や手話サークルなど」の利用のみならず、「手話通訳者派遣」

や「盲ろう者向け通訳・介助員の派遣」といった、障害者総合支援法に基づき各市町村が実施する地域生活支援事業などを活用していることが窺えた。

2) イベントなどへの参加状況 (n=135)

ろう重複児・者のイベントなどへの参加状況については「家族同伴などで参加している」が最も多く、42名(31.1%)であり、全体の3割ほどであった。次いで多かったのは、「同行援護、移動支援などのサービスを活用して参加している」状況であり、39名(28.9%)であった。「単独で参加している」状況は20名(14.8%)であった。

「参加したことがあるが今は参加していない」という回答もみられ、16名(11.9%)であり、「参加していない」が13名(9.6%)であった。「その他」が4名(3.0%)、無回答が1名(0.7%)であった。

このことから、多くのろう重複者が何らかの形でイベントなどに参加しているが、イベントなどに参加していない(参加したことはあるが今は参加していない)ろう重複者が約2割ほど存在していることが窺えた。

3) ろう重複児・者のイベントへの「参加したことはあるが今は参加していない」「参加していない」理由(複数回答)

1) にて、「参加したことがあるが今は参加していない」または「参加していない」と回答した29名の理由として、最も多かった理由は「家族の体力的負担(高齢化など)がある」であり、回答人数は29名中12名であった。次に多かった回答は「興味がない」であり、29名中9名が回答していた。「内容がわからない、(当事者にとって)できる内容がない」が8名であり、「当事者にわかるコミュニケーション方法での情報保障がされていない」が4名、「同行援護、移動支援などのサービスが利用できない」が4名であった。「場所が遠い」「移動に不安がある」「案内や情報がない」の回答がそれぞれ2名であった。「その他」が6名、無回答が1名であった。「その他」の回答にて、「施設のイベントに行きたかったのに連れていってもらえなかった。自分も行きたかったとか、お母さんが施設に言って欲しいと話している」という記述の例がみられた。このことから、イベン

ト参加を妨げる要因が複数あることが窺えた。

(3) ろう重複者がコミュニケーションをとるときそれぞれの場でのコミュニケーション手段の選択(複数回答)

ろう重複児以外のろう重複者(一般就労のろう重複者を含む102名)がコミュニケーションをとる際のそれぞれの場でのコミュニケーション手段の選択(複数回答)について検討した。ろう重複児については、学校状況のこともあるため、別の機会に検討したい。

1) 受信におけるそれぞれの場でのコミュニケーション手段(表1)

表1に示されたように、「家庭」「事業所・職場など」「友達」「ろう者コミュニティ」といった場にて、ろう重複者が選択している受信コミュニケーション手段で、最も使用数が多かった手段は「手話」であった。次いで多かった手段は「身振り」であった。

それぞれの場において、使用の割合が102名のろう重複者のうち、50%以上であったコミュニケーション手段について、次の通り述べていく。

「家庭」で「手話」を用いる人は102名中73名であり、71.6%を占めていた。次いで多かったのは「身振り」の72名(70.6%)であった。

「事業所・職場など」で用いているコミュニケーション手段は「手話」が最も多く、76名(74.5%)であった。その次に多かったのは「身振り」の60名(58.8%)であった。

「友達」とコミュニケーションをとるときコミュニケーション手段にて、最も多かったのが「手話」の59名(57.8%)であった。

「ろう者コミュニティ」で用いるコミュニケーション手段では、「手話」が最も多く、77名(75.5%)であった。

他の場では全体の50%以上であり、手話の次に多いとされている「身振り」は、「友達」や「ろう者コミュニティ」の中では50%以下であり、それぞれ50名(49.0%)、44名(43.1%)であった。

表1 それぞれの場での受信・発信におけるろう重複者のコミュニケーション手段の選択（複数回答）
（上段：回答人数 下段：102名における割合％）

		手	身	実	絵	筆	口	キ	触	そ	無
		話	振	物	カ	談	話	ュ	手	の	回
			り	を	ー			ード		他	答
				見	ド			サイ			
				る	や			ン			
					写						
					真						
家 庭	受信	73.0 (71.6)	72.0 (70.6)	46.0 (45.1)	37.0 (36.3)	33.0 (32.4)	28.0 (27.5)	18.0 (17.6)	3.0 (2.9)	12.0 (11.8)	4.0 (3.9)
	発信	72.0 (70.6)	67.0 (65.7)	41.0 (40.2)	25.0 (24.5)	28.0 (27.5)	21.0 (20.6)	13.0 (12.7)	3.0 (2.9)	14.0 (13.7)	2.0 (2.0)
事業所・ 職場など	受信	76.0 (74.5)	60.0 (58.8)	39.0 (38.2)	47.0 (46.1)	28.0 (27.5)	14.0 (13.7)	4.0 (3.9)	4.0 (3.9)	4.0 (3.9)	5.0 (4.9)
	発信	63.0 (61.8)	61.0 (59.8)	35.0 (34.3)	27.0 (26.5)	30.0 (29.4)	14.0 (13.7)	4.0 (3.9)	4.0 (3.9)	11.0 (10.8)	5.0 (4.9)
友 達	受信	59.0 (57.8)	50.0 (49.0)	21.0 (20.6)	13.0 (12.7)	18.0 (17.6)	13.0 (12.7)	5.0 (4.9)	3.0 (2.9)	10.0 (9.8)	16.0 (15.7)
	発信	50.0 (49.0)	52.0 (51.0)	23.0 (22.5)	16.0 (15.7)	14.0 (13.7)	11.0 (10.8)	7.0 (6.9)	3.0 (2.9)	12.0 (11.8)	18.0 (17.6)
ろう者コ ミュニティ	受信	77.0 (75.5)	44.0 (43.1)	27.0 (26.5)	23.0 (22.5)	14.0 (13.7)	9.0 (8.8)	6.0 (5.9)	2.0 (2.0)	8.0 (7.8)	16.0 (15.7)
	発信	69.0 (67.6)	54.0 (52.9)	25.0 (24.5)	17.0 (16.7)	13.0 (12.7)	8.0 (7.8)	8.0 (7.8)	3.0 (2.9)	12.0 (11.8)	14.0 (13.7)

注1) 50%以上のところに網掛けをしている。

2) 発信におけるそれぞれの場でのコミュニケーション手段（表1）

発信において、最も使用数が多かった手段は「手話」であった。次いで多かったコミュニケーション手段は「身振り」であった。

それぞれの場において、使用の割合が102名のろう重複者のうち、50%以上であったコミュニケーション手段について、次の通り述べていく。

「家庭」にて、最も使用が多かったコミュニケーション手段では「手話」であり、72名（70.6%）であった。次に多かったのは「身振り」の67名（65.7%）であった。

「事業所・職場など」で用いているコミュニケーション手段では「手話」が最も多く、63名（61.8%）であった。次いで多かったのは「身振り」の61名（59.8%）であった。

「友達」とコミュニケーションをとるときのコミュニケーション手段で、最も多かったのは「身振り」であり、52名（51.0%）であった。

「ろう者コミュニティ」で用いるコミュニケーション手段にて、最も多かったのは「手話」の69名（67.6%）であった。次いで、「身振り」が54名（52.9%）であった。

1) や 2) の結果から、それぞれの場における、発信や受信でのコミュニケーション手段の選択の傾向として、「手話」「身振り」といった視覚的コミュニケーション手段の使用数がかなり多いが、「筆談」「口話」「キョードサイン」といった手段が全体の約30%以下と、あまり多く用いられていないという状況があることが窺えた。また、それぞれの場にて、日常的に理解の補助手段として用いられるような媒介である「絵カードや写真を見る」「実物を見る」といった手段が「手話」や「身振り」と比較して少ない傾向が窺えた。

以上から、ろう重複児・者の家族からみれば、「家庭」「事業所・職場など」「ろう者コミュニティ」における、ろう重複児・者本人の主たるコミュニケーション手段は受信、発信において、手話が約7割と

いう高い割合で用いられていることが窺えた。「友達」においては、他の場と比較すると、手話の使用はそれほど高い割合ではないことが示された。

(4) ろう重複児・者と他者とのコミュニケーション状況

1) 日常的報告におけるコミュニケーション状況

①日常的報告 (15項目)

家族から捉えた場合での、ろう重複児・者の日常的報告におけるコミュニケーション状況の15項目を、「当てはまる」との回答数が多い順に検討した(表2)。

「当てはまる」状況が最も多かった項目は自分が欲しいものを伝えるコミュニケーション状況がほとんどであり、「1. 自分がその場にある欲しいものについて指差して伝える」(104名、77.0%)であった。次いで多かったのが、「2. 自分が欲しいものや行きたい場所のところの名前を伝える」(75名、55.6%)であった。これらの2項目は15項目のうち50%以上の上位を占めており、それらの項目はろう重複児・者の【自分が欲しいものを伝えるコミュニケーション状況】を示していることが窺えた。

他の13項目を「当てはまる」状況が多い順に示していくと、全体の30%以上から50%以下を占めている項目は「15. 明日何を予定について〇〇に話す」(51名、37.8%)、「3. 家族内であった出来事について〇〇に話す」(50名、37.0%)、「10. 今日体験したことについて〇〇に話す」(49名、36.3%)、「8. 学校(施設)であった出来事について〇〇に話す」(48名、35.6%)の4項目であった。それらの項目は、【ある場所で起こったことや体験したこと及び行動の予定についてのコミュニケーション状況】であることが窺えた。

全体の30%以下であった項目は「6. 学校(施設)での人間関係(当事者自身である自分と他の人との関係)について〇〇に話す」(37名、27.4%)、「5. 家族について思ったことや感じたことを〇〇に話す」(34名、25.2%)、「9. 最近、興味を持っていることについて〇〇に話す」(30名、22.2%)「4. 家族内で話題になったことについて〇〇に話

す」(29名、21.5%)、「7. 学校(施設)での人間関係について〇〇に話す」(29名、21.5%)、「14. 誰かに聞いた話やニュースなどについて、驚いたり感動したりしたことを〇〇に話す」(28名、20.7%)、「13. 今日あった嫌な出来事や、腹が立った出来事を〇〇に話す」(24名、17.8%)、「11. 友人とどんな遊びをしたのか、どんな話をしたかを〇〇に伝える」(21名、15.6%)、「12. 毎日の生活パターンについて〇〇に話している」(20名、14.8%)の9項目であった。これらの9項目は【抽象的な内容についてのやりとりや気持ちに関するコミュニケーション状況】を表す項目であり、ろう重複者にとってはかなり高度なコミュニケーション状況であることが窺えた。

②日常的報告におけるコミュニケーション状況におけるそれぞれの場でのコミュニケーション手段について

日常的報告におけるコミュニケーション状況の各項目での受信・発信における、「家庭」「事業所・職場など」「友達」「ろう者コミュニティ」といった場で、結果(3)にみられたろう重複児・者が選択しているコミュニケーション手段の50%以上であった「手話」「身振り」におけるコミュニケーション状況を表2に示した。

【自分が欲しいものを伝えるコミュニケーション状況】にて、70%以上の使用状況がみられたコミュニケーション手段は「手話」と「身振り」であった。受信・発信にて、手話の使用がもっとも多かった場はろう者コミュニティであった。

【ある場所で起こったことや体験したこと及び行動の予定についてのコミュニケーション状況】では、受信・発信とともに多かったのはろう者コミュニティにて手話を用いてコミュニケーションをとっていることであった。「友達」とコミュニケーションをとる時は受信・発信とともに手話であった。「家庭」では、発信の時手話を用いる状況が多く、「事業所・職場など」では、受信にて手話を用いることが多いという状況であった。

【抽象的な内容についてのやりとりや気持ちに関するコミュニケーション状況】にて、受信や発信に

表2 日常的報告におけるコミュニケーション状況にてできる人のそれぞれの場とコミュニケーション手段

(上段：回答人数 下段：回答比率%)

コミュニケーション状況	回答人数	受信・発信	場・コミュニケーション手段(複数回答)						ろう者コミュニティ	
			家庭		事業所・職場など		友達			
			手話	身振り	手話	身振り	手話	身振り	手話	身振り
【自分が欲しいものを伝えるコミュニケーション状況】										
[1. 自分がその場にある欲しいものについて指差して伝える]	104 (77.0)	受信	54 (51.9)	81 (77.9)	72 (69.2)	58 (55.8)	61 (58.7)	52 (50.0)	77 (74.0)	52 (50.0)
		発信	72 (69.2)	72 (69.2)	59 (56.7)	56 (53.8)	54 (51.9)	53 (51.0)	68 (65.4)	59 (56.7)
[2. 自分が欲しいものや行きたい場所のところの名前を伝える]	75 (55.6)	受信	37 (49.3)	45 (60.0)	36 (70.6)	21 (41.2)	54 (72.0)	31 (41.3)	61 (81.3)	32 (42.7)
		発信	58 (77.3)	42 (56.0)	47 (62.7)	33 (44.0)	52 (69.3)	35 (46.7)	58 (77.3)	38 (50.7)
【ある場所で起こったことや体験したこと及び行動の予定についてのコミュニケーション状況】										
[15. 明日何をする予定について〇〇に話す]	51 (37.8)	受信	32 (62.7)	33 (64.7)	36 (70.6)	21 (41.2)	42 (82.4)	24 (47.1)	49 (96.1)	25 (49.0)
		発信	58 (77.3)	42 (56.0)	47 (62.7)	33 (44.0)	52 (69.3)	35 (46.7)	58 (77.3)	38 (50.7)
[3. 家族内であった出来事について〇〇に話す]	50 (37.0)	受信	27 (54.0)	29 (58.0)	35 (70.0)	134 (76.0)	37 (76.0)	23 (46.0)	43 (86.0)	23 (46.0)
		発信	43 (86.0)	27 (54.0)	32 (64.0)	20 (40.0)	37 (74.0)	24 (48.0)	42 (84.0)	23 (46.0)
[10. 今日体験したことについて〇〇に話す]	49 (36.3)	受信	43 (51.0)	25 (51.0)	32 (28.6)	17 (34.7)	38 (77.6)	22 (44.9)	42 (85.7)	20 (40.8)
		発信	40 (81.6)	25 (51.0)	30 (61.2)	20 (40.8)	38 (77.6)	25 (51.0)	42 (85.7)	23 (46.7)
[8. 学校(施設)であった出来事について〇〇に話す]	48 (35.6)	受信	25 (52.1)	27 (56.3)	34 (37.5)	19 (39.6)	36 (75.0)	24 (50.0)	41 (85.4)	22 (45.8)
		発信	40 (83.3)	27 (56.3)	29 (60.4)	21 (43.8)	36 (75.0)	26 (54.2)	40 (83.3)	24 (50.0)
【抽象的な内容についてのやりとりや気持ちに関するコミュニケーション状況】										
[6. 学校(施設)での人間関係(当事者自身である自分と他の人との関係)について〇〇に話す]	37 (27.4)	受信	16 (43.2)	16 (43.2)	25 (45.9)	10 (27.0)	29 (78.4)	13 (35.1)	30 (81.1)	13 (35.1)
		発信	28 (75.7)	16 (43.2)	21 (56.8)	13 (35.1)	29 (78.4)	15 (40.5)	29 (78.4)	14 (37.8)
[5. 家族について思ったことや感じたことを〇〇に話す]	34 (25.2)	受信	15 (44.1)	14 (41.2)	25 (73.5)	9 (26.5)	28 (82.4)	13 (38.2)	28 (82.4)	12 (35.3)
		発信	25 (73.5)	12 (35.3)	21 (61.8)	9 (26.5)	28 (82.4)	14 (41.2)	28 (82.4)	12 (35.3)
[9. 最近、興味を持っていることについて〇〇に話す]	30 (22.2)	受信	14 (46.7)	16 (53.3)	18 (60.0)	8 (26.7)	23 (76.7)	12 (40.0)	24 (80.0)	12 (40.0)
		発信	25 (83.3)	13 (43.3)	17 (56.7)	8 (26.7)	22 (73.3)	13 (43.3)	25 (83.3)	12 (40.0)
[4. 家族内で話題になったことについて〇〇に話す]	29 (21.5)	受信	17 (58.6)	10 (34.5)	20 (69.0)	10 (34.5)	24 (82.8)	11 (37.9)	24 (82.8)	8 (27.6)
		発信	23 (79.3)	11 (37.9)	18 (62.1)	9 (31.0)	24 (82.8)	12 (41.4)	24 (82.8)	9 (31.0)
[7. 学校(施設)での人間関係について〇〇に話す]	29 (21.5)	受信	13 (44.8)	12 (41.4)	17 (58.6)	7 (24.1)	25 (86.2)	10 (34.5)	25 (86.2)	7 (24.1)
		発信	25 (86.2)	11 (37.9)	16 (55.2)	7 (24.1)	25 (86.2)	11 (37.9)	25 (86.2)	8 (27.6)
[14. 誰かに聞いた話やニュースなどについて、驚いたり感動したりしたことを〇〇に話す]	28 (20.7)	受信	13 (46.4)	11 (39.3)	19 (67.9)	9 (32.1)	24 (85.7)	11 (39.3)	26 (92.9)	10 (35.7)
		発信	21 (75.0)	9 (32.1)	19 (67.9)	8 (28.6)	23 (82.1)	10 (35.7)	25 (89.3)	10 (35.7)
[13. 今日あった嫌な出来事や、腹が立った出来事を〇〇に話す]	24 (17.8)	受信	10 (41.7)	10 (41.7)	17 (79.2)	9 (37.5)	21 (87.5)	8 (33.3)	22 (91.7)	8 (33.3)
		発信	18 (75.0)	7 (29.2)	17 (70.8)	9 (37.5)	21 (87.5)	9 (37.5)	25 (89.3)	10 (35.7)
[11. 友人とどんな遊びをしたのか、どんな話をしたかを〇〇に伝える]	21 (15.6)	受信	9 (42.9)	10 (47.6)	14 (66.7)	4 (19.0)	21 (100.0)	8 (38.1)	19 (90.5)	7 (33.3)
		発信	19 (90.5)	8 (38.1)	1 (66.7)	4 (28.6)	20 (95.2)	8 (38.1)	19 (90.5)	6 (28.6)
[12. 毎日の生活パターンについて〇〇に話している]	20 (14.8)	受信	9 (45.0)	10 (50.0)	14 (85.0)	4 (2.0)	15 (75.0)	8 (40.0)	17 (85.0)	6 (30.0)
		発信	17 (85.0)	9 (45.0)	13 (65.0)	6 (30.0)	15 (75.0)	7 (35.0)	16 (80.0)	6 (30.0)

注1) 回答比率が70%以上のところに網掛けをしている。
 注2) 回答比率は135名に対する割合である。
 注3) 「家庭」「事業所・職場など」「友達」「ろう者コミュニティ」の手話・身振りにおける%は各項目の回答人数における割合である。
 注4) 「〇〇」はろう重複児・者にとってコミュニケーションが多く図れる相手である。
 注5) 「施設」は障害福祉サービスなどが行われる事業所・施設を表す。
 注6) 質問項目にある「当事者」は「ろう重複児・者」のことを表す。質問紙調査での項目では「当事者」という表記を用いた。

において手話の使用が多いのは「友達」「ろう者コミュニティ」という場であった。このことから、受信・発信においても

発信にて手話が多いのは「家庭」であった。「事業所・職場など」にて、70%以上の使用割合がみられたのは、「5. 家族について思ったことや感じたことを〇〇に話す」、「13. 今日あった嫌な出来事や、腹が立った出来事を〇〇に話す」、「12. 毎日の生活パターンについて〇〇に話している」での受信においての「手話」であった。

③日常的報告の相手について

家族に、ろう重複児・者にとってコミュニケーションが多く図れる相手はどんな人なのかを自由記述で回答を求め、ろう重複児、ろう重複者ごとに回答内容を類型化した。ろう重複児・者の親、きょうだいなどを「家族」、ろう重複児が通っている学校の先生を「学校」、ろう重複児・者が利用しているサービスの職員、送迎ヘルパーなどを「施設」とした。

日常的報告におけるコミュニケーション状況での、ろう重複児の相手は、「家族のみ」(10名)、「家族・学校」(5名)、「学校・施設」(1名)、「施設のみ」(2名)、「学校のみ」(1名)、「友人のみ」(1名)であった。また、無回答が13名であった。

また、一般就労のろう重複者や成人向けのサービスを利用しているろう重複者がコミュニケーションを多く図っている相手は、「家族のみ」(31名)、「家族・施設」(23名)、「友人のみ」(3名)、「家族・施設・友人」(3名)、「施設のみ」(6名)、「家族・友人」(2名)、「施設・友人」(2名)であった。また、無回答が32名であった。

このことから、ろう重複児・者がコミュニケーションを多く図っている相手は「家族」がほとんどであることが窺えた。ただ、施設、友人などとコミュニケーションを多く図っているろう重複者も少なからずとも存在していることが分かっている。

2) 不満や要望の率直な表明のコミュニケーション状況

①不満や要望の率直な表明(4項目)

家族から捉えた場合の、ろう重複児・者の不満や

要望の率直な表明のコミュニケーション状況の4項目について、「当てはまる」といった回答数が多い順に、表3に示した。

「当てはまる」状況が最も多かった項目は「1. イライラしていることを〇〇に伝える」であり、40名(29.6%)のろう重複児・者であった。このことから、ある程度のろう重複者はイライラしていることを、コミュニケーションを多く図っている相手に伝えていることが窺えた。

次いで多かったのは、「2. イライラしていることを伝える相手を分けている」と「4. 不満を感じたときは、こうして欲しいという自分の希望を〇〇に伝える」という状況を示す項目であった。それぞれの状況で、21名(15.6%)のろう重複児・者が、イライラしていることを伝える相手を分けていた(例えば、Aさんにはイライラしていることを言うが、Bさんには言わないなどの区別があるなど)。このことから、不満を感じたときは自分の希望を相手に伝えることができることが窺えた。

「当てはまる」といった回答数が最も少なかったのは「3. 腹が立った時、その理由を考えて、〇〇に話す」の項目であった(12名、8.9%)。この項目は、ろう重複者にとって自分で考えて表出することがかなり困難であるコミュニケーション状況であることが窺えた。

②不満や要望の率直な表明のコミュニケーション状況におけるそれぞれの場でのコミュニケーション手段について

不満や要望の率直な表明のコミュニケーション状況において、「家庭」「友達」「ろう者コミュニティ」のそれぞれの場で70%以上の使用状況がみられたコミュニケーション手段は受信・発信とも全て「手話」であった。「1. イライラしていることを〇〇に伝える」では、受信・発信とも家庭やろう者コミュニティでは「手話」でコミュニケーションをとっていることが窺えた。「2. イライラしていることを伝える相手を分けている」といったコミュニケーション状況では、受信・発信とも「家庭」「事業所・職場など」「友達」「ろう者コミュニティ」において手話を用いる傾向が高かった。「4. 不満を感じた

表3 不満や要望の率直な表明のコミュニケーション状況におけるそれぞれの場とコミュニケーション手段
(上段：回答人数 下段：回答比率%)

コミュニケーション状況	回答人数	受信・発信	場・コミュニケーション手段(複数回答)							
			家庭		事業所・職場など		友達		ろう者コミュニティ	
			手話	身振り	手話	身振り	手話	身振り	手話	身振り
[1. イライラしていることを〇〇に伝える]	40 (29.6)	受信	32 (80.0)	27 (67.5)	26 (65.0)	19 (47.5)	29 (65.0)	17 (42.5)	33 (82.5)	20 (50.0)
		発信	31 (77.5)	23 (57.5)	24 (60.0)	19 (47.5)	25 (62.5)	18 (45.0)	31 (77.5)	21 (52.5)
[2. イライラしていることを伝える相手を分けている]	21 (15.6)	受信	15 (71.4)	14 (66.7)	14 (66.7)	10 (47.6)	16 (76.2)	11 (52.4)	18 (85.7)	11 (52.4)
		発信	16 (76.2)	11 (52.4)	13 (61.9)	8 (38.1)	15 (71.4)	8 (38.1)	18 (85.7)	19 (90.5)
[4. 不満を感じたときは、こうして欲しいという自分の希望を〇〇に伝える]	21 (15.6)	受信	14 (66.7)	11 (52.4)	13 (61.9)	5 (23.8)	16 (76.2)	9 (42.9)	16 (76.2)	9 (42.9)
		発信	15 (71.4)	9 (42.9)	13 (61.9)	6 (28.6)	15 (71.4)	7 (33.3)	16 (76.2)	8 (38.1)
[3. 腹が立った時、その理由を考えて、〇〇に話す]	12 (8.9)	受信	8 (66.7)	4 (33.3)	8 (66.7)	4 (33.3)	9 (75.0)	5 (41.7)	8 (66.7)	5 (41.7)
		発信	7 (58.3)	4 (33.3)	7 (58.3)	3 (25.0)	8 (66.7)	4 (33.3)	8 (66.7)	4 (33.3)

注1) 回答比率が70%以上のところに網掛けをしている。

注2) 各項目の回答人数の回答比率は135名に対する割合である。

注3) 「家庭」「事業所・職場など」「友達」「ろう者コミュニティ」の手話・身振りにおける回答比率は各項目の回答人数における割合である。

注4) 「〇〇」はろう重複児・者にとって不満や要望の表明ができる相手である。

ときは、こうして欲しいという自分の希望を〇〇に伝える」状況では、発信による「家庭」での手話の使用が多く、受信・発信とも「友達」「ろう者コミュニティ」では手話の使用が多いことが示されていた。「3. 腹が立った時、その理由を考えて、〇〇に話す」状況では、受信において「友達」という場で手話を使用することが最も高かった。

③不満や要望の率直な表明の相手について

家族から捉えた場合の、ろう重複児・者が不満や要望の率直な表明のコミュニケーション相手は次の通りであった。

ろう重複児が不満や要望の率直な表明ができる相手は、「家族」が最も多く8名であった。「家族・学校」が2名、「家族・施設」が1名であった。「その他」が4名であった。無回答は18名であった。ろう重複者（一般就労のろう重複者も含む）にて、最も多かった、不満や要望の率直な表明ができるコミュニケーションの相手は「家族のみ」であり27名であった。「家族・施設」が17名、「施設のみ」が2名、「施設とその他」が1名、「その他」が2名

であった。また、無回答は53名であった。このことから、ろう重複児と同様に、コミュニケーションを多く図っている相手は「家族」であり、ろう重複者のコミュニケーションの相手が限定されていることが窺えた。

なお、ろう重複児、ろう重複者の相手で「その他」といった回答では、「イライラしている時は自傷・他傷行為がみられる」といった自由記述が5件ほどみられた。このことは、回答数は僅かであるが、ろう重複児・者がイライラしている感情をうまく伝えられないため、自傷・他傷行為として表出している事例であることが窺えた。

3) イベント参加有無によるコミュニケーション状況におけるそれぞれの場でのコミュニケーション手段について

ろう重複児・者のイベントなどに参加している群（以下、参加有群）と参加していない群（以下、参加無群）に分け、できるコミュニケーション状況でのそれぞれの場とコミュニケーション手段を表4に示した。できるコミュニケーション状況については、

表4 ろう重複見・者のイベントなどの参加有無による、できるコミュニケーション状況とコミュニケーション手段 (左: 回答人数 右: 回答比率%)

参加有無	コミュニケーション状況		場・コミュニケーション手段(複数回答)						ろう者コミュニケーション	
	受信	発信	手話	身振り	手話	手話	手話	手話	手話	身振り
参加有 (n=101)	受信 60(59.4)	発信 65(64.4)	58(57.4)	46(45.5)	52(51.5)	38(37.6)	64(63.4)	42(41.6)	64(63.4)	42(41.6)
参加無 (n=29)	受信 18(62.1)	発信 16(55.2)	22(75.9)	11(37.9)	14(48.3)	12(41.4)	9(31.0)	14(48.3)	13(44.8)	14(20.7)
参加有 (n=101)	受信 50(49.5)	発信 49(48.5)	37(36.6)	36(35.6)	48(47.5)	29(28.7)	44(43.6)	28(27.7)	54(53.5)	29(28.7)
参加無 (n=29)	受信 10(34.5)	発信 9(31.0)	8(27.6)	2(6.9)	7(24.1)	2(6.9)	7(24.1)	4(13.8)	50(49.5)	32(31.7)
参加有 (n=101)	受信 40(39.6)	発信 40(39.6)	26(25.7)	26(25.7)	31(30.7)	18(17.8)	37(36.6)	20(19.8)	42(41.6)	22(21.8)
参加無 (n=29)	受信 10(34.5)	発信 10(34.5)	8(27.6)	7(24.1)	7(24.1)	3(10.3)	7(24.1)	5(17.2)	39(38.6)	23(22.8)
参加有 (n=101)	受信 18(17.8)	発信 15(14.9)	10(9.9)	6(5.9)	16(15.8)	9(8.9)	20(19.8)	8(7.9)	20(19.8)	8(7.9)
参加無 (n=29)	受信 0(0.0)	発信 0(0.0)	0(0.0)	1(3.4)	14(13.9)	8(7.9)	18(17.8)	8(7.9)	19(18.8)	7(6.9)
参加有 (n=101)	受信 17(16.8)	発信 14(13.9)	9(8.9)	13(12.9)	6(5.9)	11(10.9)	19(18.8)	7(6.9)	18(17.8)	7(6.9)
参加無 (n=29)	受信 3(10.3)	発信 3(10.3)	2(6.9)	2(6.9)	2(6.9)	0(0.0)	3(10.3)	2(6.9)	15(14.9)	6(5.9)
参加有 (n=101)	受信 15(14.9)	発信 11(10.9)	8(7.9)	5(5.0)	13(12.9)	4(4.0)	13(12.9)	7(6.9)	16(15.8)	6(5.9)
参加無 (n=29)	受信 2(6.9)	発信 2(6.9)	2(6.9)	1(3.4)	10(9.9)	5(5.0)	10(9.9)	5(5.0)	11(10.9)	4(4.0)
参加有 (n=101)	受信 26(25.7)	発信 24(23.8)	20(19.8)	18(17.8)	22(21.8)	15(14.9)	24(23.8)	15(14.9)	28(27.7)	17(16.8)
参加無 (n=29)	受信 6(20.7)	発信 6(20.7)	7(24.1)	4(13.8)	4(13.8)	4(13.8)	2(6.9)	2(6.9)	5(17.2)	3(10.3)
参加有 (n=101)	受信 12(11.9)	発信 9(8.9)	7(6.9)	6(5.9)	12(11.9)	9(8.9)	14(13.9)	10(9.9)	15(14.9)	10(9.9)
参加無 (n=29)	受信 3(10.3)	発信 3(10.3)	2(6.9)	2(6.9)	2(6.9)	1(3.4)	2(6.9)	1(3.4)	3(10.3)	1(3.4)
参加有 (n=101)	受信 11(10.9)	発信 11(10.9)	8(7.9)	10(9.9)	10(9.9)	6(5.9)	11(10.9)	5(5.0)	11(10.9)	6(5.9)
参加無 (n=29)	受信 3(10.3)	発信 3(10.3)	3(10.3)	3(10.3)	3(10.3)	1(3.4)	1(3.4)	1(3.4)	3(10.3)	1(3.4)
参加有 (n=101)	受信 11(10.9)	発信 11(10.9)	8(7.9)	10(9.9)	10(9.9)	6(5.9)	11(10.9)	5(5.0)	11(10.9)	6(5.9)
参加無 (n=29)	受信 3(10.3)	発信 3(10.3)	3(10.3)	3(10.3)	3(10.3)	1(3.4)	1(3.4)	1(3.4)	3(10.3)	1(3.4)

注1) 回答比率の差が15.5以上多いところに網掛けをしている。

[1. 自分がその場にある欲しいものについて指差して伝える]

[2. 自分が欲しいものや行きたい場所のところの名前を伝える]

[15. 明日何をやる予定について〇〇に話す]

[13. 今日あった嫌な出来事や、腹が立った出来事を〇〇に話す]

[11. 友人とどんな遊びをしたのか、どんな話をしたかを〇〇に伝える]

[12. 毎日の生活パターンについて〇〇に話している]

[1. イライラしていることを〇〇に伝える]

[2. イライラしていることを伝える相手を分けている]

[4. 不満を感じたときは、こうして欲しいという自分の希望を〇〇に伝える]

不満や要望の率直な表明コミュニケーション状況

上位3項目
日常的報告におけるコミュニケーション状況
下位3項目

結果(4)にて抽出された日常的報告におけるコミュニケーション状況の上位3項目と下位3項目にて、イベント参加有無による、受信・発信におけるそれぞれの場(「家庭」「事業所・職場など」「友達」「ろう者コミュニティ」)におけるコミュニケーション手段の使用について比較検討した。

上位3項目である「1. 自分がその場にある欲しいものについて指差して伝える」状況では、受信・発信を問わず、家庭では参加無群の「身振り」の使用が参加有群より多かった。このことから、「家庭」の中で欲しいものを伝えるという状況が身振りに限定されてしまい、家庭以外の場にコミュニケーションが拡がらないことが窺えた。同じ「1. 自分がその場にある欲しいものについて指差して伝える」状況では、参加有群での「事業所・職場など」「友達」「ろう者コミュニティ」における手話の使用が多かった。

「2. 自分が欲しいものや行きたい場所のところの名前を伝える」状況では、参加有群の「ろう者コミュニティ」での受信における手話の使用が最も多かった。

下位3項目の「13. 今日あった嫌な出来事や、腹が立った出来事を〇〇に話す」状況にて、参加有群の方が「家庭」「友達」という場で受信において手話を使用することが多かった。

イベントなどの余暇活動に参加するろう重複児・者は、日常的報告におけるコミュニケーション状況で手話を用いている傾向があることが窺えた。

今回の調査では、参加有群は101名、参加無群は29名という状況での比較であった。必ずしも、手話で様々なコミュニケーション状況でやりとりができるろう重複児・者のみがイベントなどの余暇活動に参加できるわけではない。しかし、イベントに参加しない理由として「興味ない」「内容がわからない、(ろう重複児・者にとって)できる内容がない」が挙げられたことから、ろう重複児・者のコミュニケーション状況に応じた内容、またはコミュニケーション能力を把握した上でコミュニケーションの範囲を広げられるような内容のイベントなどの余暇活動を検討することの必要性が窺えた。

4. 考察

ろう重複児・者の家族を対象とした質問紙調査を行い、家族から捉えたらろう重複児・者のコミュニケーションの実態を明らかにした。本稿では、以下の2点について考察する。

(1) ろう重複児・者のイベントなどの余暇活動参加状況から考えられるコミュニケーション

ろう重複児・者の手話や文字通訳(要約筆記、全文入力、音声認識の活用など)のコミュニケーションが保障された事業・社会資源などの利用において、今回の調査対象者の半数以上が「ろう重複児・者が集まる事業所・施設など」を利用している。また、「特別支援学校(聴覚障害)/ろう学校」を利用しているろう重複児・者も半数以上であった。「特別支援学校(聴覚障害)/ろう学校」に関わっているのは、在学者のみならず、学校を卒業した成人であるろう重複者も何らかの形でつながりを持っているということが考えられた。また、意思疎通支援事業である「手話通訳者等派遣」や「盲ろう者向け通訳・介助員派遣」を利用することで、ろう重複者の日常生活をよりコミュニケーションを豊かにしていることが考えられる。

イベントなどの参加において、約75%のろう重複児・者が「家族同伴」「同行援護・移動支援などのサービスを活用して参加」「単独で参加」の方法でイベントなどに参加していることが窺えた。その一方で、イベントに参加していないろう重複児・者の存在もみられた。参加しない(または以前は参加していたが今は参加していない)理由は主に「家族の体力的負担(高齢化など)」「興味ない」「内容がわからない、(ろう重複児・者にとって)できる内容がない」であったことから、「家族同伴」で参加することが高齢化していく家族にとっては体力的な負担があり、それらによってイベントに参加できないということは、ろう重複者と社会との繋がりが切れてしまうような危うさがみられる。イベント参加は子どもや家族と社会をつなぐみたいな役割がある。さらに、ろう重複児・者の親は、常に「(親自身も)

イベントに参加したいけど、(ろう重複児・者である)我が子をどうするか」がついてまわる(群馬大学, 2019; 二神, 2020 など)ことが考えられる。ろう重複児・者の家族対象のインタビュー調査(群馬大学, 2019)では、「親の会もろう者関連大会に参加したいが、朝から夕方までの長い時間の中で、健常の小さな子どもの託児はあるが、成人のろう重複者に対して託児がない。ろう重複児・者が楽しめる内容であればいいけど、じっとしていなければならない内容やその時間帯ではボランティアが付き添ってほしい。ろう重複児・者(の世話)が大変だからその親も参加できないというのはおかしい」という趣旨の、イベント参加についての思いが寄せられた。このことから、ろう重複児・者の親に配慮がされていない、また、ろう重複児・者が分かる内容やコミュニケーションの発展を考慮した内容のイベントなどの余暇活動が実施されていないことも、ろう重複児・者のイベントなどへの参加、そしてろう重複児・者のコミュニケーションの発展を妨げる要因になっていることが考えられよう。逆に言い換えれば、ろう重複児・者のコミュニケーション状況を広げるためには、イベントなどの余暇活動の実施が求められるのではないだろうか。

(2) ろう重複児・者のコミュニケーション状況

今回の調査から、家族はろう重複児・者の主なコミュニケーション手段は手話であると認識していることが考えられる。

永石(2007)などにて、ろう重複児・者の重複状況別や障害の程度別におけるコミュニケーション手段に関する調査がされてきたが、コミュニケーション手段はコミュニケーションの相手や場によって異なる可能性がある。今回の調査では、それぞれの場における受信・発信コミュニケーション手段の選択について検討したところ、それぞれの場による受信・発信コミュニケーション手段の選択の傾向はほぼ同じであった。しかし、発信におけるコミュニケーション手段では、筆談の割合が「事業所・職場など」において「家庭」「友達」「ろう者コミュニティ」より僅かながら高い傾向を示していた。この背景とし

て、次のようなことが考えられる。ろう重複児・者を対象とした手話言語学的研究の数が少なく、成果も不足しているのが現状であるため、著者の考察の範囲であるが、聞こえのみの障害を有するろう児・者が表出する手話と比較すると、他に障害があるろう重複児・者が表出する手話は独自であったり曖昧な手話を用いたりすることが多いため、分からないという事例がろう重複児・者支援の現場でみられるといった印象を受ける。甲斐・金澤・二神・吉村・木村(2020)は、ろう重複者と関わる相談支援専門員対象にコミュニケーションの実態を把握するための質問紙調査を実施したところ、手話習得経験がある相談支援専門員は特に大切なコミュニケーション手段は手話であり、手話習得経験がない相談支援専門員は特に大切なコミュニケーション手段として筆談を選択していた。今回においても、「事業所・職場など」の支援者側に手話などの知識・技能、手話に対する認識を有している者が少ないため、ろう重複児・者が表出した手話分かる者が事業所や職場などにいないまたはいたとしても人数は僅かであるため、ろう重複者はやむ得なく「筆談」という発信コミュニケーション手段を選択していると推察される点である。

「家庭」にて、発信におけるコミュニケーション手段の割合が高かったのは「手話」であった。その背景として、家族はろう重複児・者と幼少の時から生活経験をともにしているため、文脈を推測してろう重複児・者が表出している手話の意味を解釈することによって、発信コミュニケーションを受けとめていることが考えられる。

なお、受信におけるコミュニケーション手段で、「家庭」「事業所・職場など」の場では全体の50%以上であり、手話の次に多いとされている「身振り」は、「友達」や「ろう者コミュニティ」という場では50%以下であった。しかし、発信におけるコミュニケーション手段では「友達」や「ろう者コミュニティ」にて「身振り」は50%以上であり、「友達」では「手話」が50%以下であった。このことから、「友達」「ろう者コミュニティ」はろう者や手話に長けている手話話者で構成されているため、身振りで

発信しても、周りの話を理解したり受けとめたりするコミュニケーションは「手話」の方が有利と考えられよう。

家族が捉えた場合の、ろう重複児・者と他者との日常的報告におけるコミュニケーション状況では、ろう重複児及びろう重複者ともに、指さしや具体的なものや場所の名前を利用して、自分が欲しいものや行きたい場所について簡単な指示や要求ができることが考えられ、それらは具体物を媒介としたコミュニケーション状況の範囲であるといえよう。自分が欲しいものや行きたい場所についてのやりとり以外においての、【ある場所で起こったことや体験したこと及び行動の予定についてのコミュニケーション状況】であることを示す4項目は、時間と場所が異なる話を他者に伝えることができるといった意図がある。それらが可能なろう重複児・者が約35%から40%ほど存在していたことから、時間と場所が異なる話を他者に伝えるといった言語運用能力を有しているろう重複者が一定程度存在していることが推測された。

しかし、表2に示されるように、【抽象的な内容についてのやりとりや気持ちに関するコミュニケーション状況】の9項目に当てはまらないろう重複児・者が約3割以下であった。このことから、ろう重複児・者にとってのコミュニケーションは日常生活経験や要求に関することであると考えられる。

「日常的報告」は、具体的な情報を伝達するだけでなく、どのような事柄でも共有する関係であることを伝達している（多川・吉田, 2006）ことから、今回の調査で明らかになったろう重複児・者の日常的報告におけるコミュニケーション状況では、抽象度が極めて高い内容についてのやりとりや、「思っていることを伝えるということが絶たれている（永石, 2007）」状況や、どのような事柄でも共有することがたやすいことではないことが考えられよう。

家族から捉えた場合のろう重複児・者と他者との不満や要望の率直な表明におけるコミュニケーション状況では、イライラしていることを、コミュニケーションを多くとっている相手に伝えるろう重複児・者が全体の3割ほど、不満を感じたときは自分の希

望を相手に伝えることができるろう重複児・者は約2割以下であった。不満などの表明は、相手が自分にもたらした不利益を否定的に表現する（牧原, 2008）とされており、高度な言語運用力を必要とする。そのことが不満や要望の率直な表明におけるコミュニケーションができるろう重複児・者が少ないことに関係しているのではないだろうか。家族が捉えている「ろう重複者のコミュニケーション」は手話であるが、ある程度通じ合える範囲のコミュニケーションに留まってしまい、不満や要望の表明にみられるような複雑な内容にコミュニケーションが発展されないことが推察された。

一般的に、コミュニケーションは受信と発信から成り立つため、決して一人で成立するものではなく、必ず相手が必要となる。ろう重複児・者のコミュニケーションを考えるにあたって、武田・佐川（2006）は、対象児の個体要因だけでなく、環境要因すなわちコミュニケーションのパートナーとしての教師や他の児童生徒、家族といった要因を考慮に入れることも大切である、と指摘している。そこで、今回は、家族対象に、ろう重複児・者の日常的な報告や不満や要望の率直な表明におけるコミュニケーションの相手について調査した。家族は家族以外でのコミュニケーション相手について把握していない可能性が考えられるため、「家族」という回答が多かったのではないだろうか。しかし、今回の調査では、家庭における受信・発信コミュニケーション手段は手話や身振りといった視覚的手段が全体の約6割といった結果がみられたことから、ろう重複児・者にとって理解・表出ができるコミュニケーション手段でコミュニケーションを形成させるなど、家族がコミュニケーションのパートナー的役割を持っていることが考えられよう。

なお、今回の調査でのコミュニケーション状況を問う項目作成は探索的な試みであり、さらに研究を重ねて、妥当性と信頼性について検討するとともにそれらを高めていく必要がある。

(4) 今後の課題

以上の考察を総合し、今後の課題として、以下の

3点が指摘できる。

第一に、家族会に所属していない家族が捉えた場合の、ろう重複児・者のコミュニケーションの実態把握についてである。

今回の調査における質問紙は、家族会などの団体に配布した。全国的にみると、家族会は親亡き後のろう重複児・者の生活などに不安を抱え、ろう学校（聴覚障害特別支援学校）や聴覚障害者関係団体とともに、ろう重複児・者に対応した事業所や施設などを設立する傾向が高い。ろう重複児・者に対応した事業所などがあることによって、ろう重複児・者が集まることでコミュニケーション環境が保障され、ろう重複児・者が手話でコミュニケーションを図ることができることの重要性を家族会は認識している。対象者である家族は家族会に所属しているため、手話に対する認識が高かったことが考えられる。

その一方で、家族会などに所属していない、また家族会のことを全く知らない家族による、ろう重複児・者のコミュニケーションの実態の様相は把握できていない。そのような家族は、家族会の存在を知らないため、ろう重複児・者に特化したサービス事業所・施設などや手話などのコミュニケーションに関する情報が得られないまま、音声言語でのやりとりを中心とし、知的障害に起因する諸問題への対応をまず考えて、知的障害に対応したサービスを利用していることも考えられる。結果として、ろう重複児・者は、コミュニケーションが制約された環境におかれることになり、コミュニケーションの発展が阻害される可能性があることも考えられよう。

このようなことを踏まえると、家族会などに所属していない家族が捉えている、ろう重複児・者のコミュニケーションの実態を把握することが望まれる。

第二に、ろう重複児・者や彼らの家族の余暇活動サポートの検討についてである。

今回の調査にみられたように、ろう重複児・者の家族はイベントなどへの参加において多くの悩みを抱えている。イベントなどの参加はろう重複児・者や彼らの家族の余暇活動でもあり、余暇活動は彼らと社会をつなぐものである。ろう重複児・者や家族

が参加できる余暇活動づくりを行うことで、彼らのコミュニケーション環境を保障することが今後の課題であろう。

第三に、ろう重複児・者へのコミュニケーション支援スキルを有する支援者育成についてである。

ろう重複児・者本人の障害程度のみならず、発達レベルに応じてどのようなコミュニケーション手段を選択し、どのようなコミュニケーション状況をつくっていくのかということが、ろう重複児・者へのコミュニケーション支援においては、大きな課題であると考えられる。松崎（2017）は、ろう重複児の手話を主とするコミュニケーションの形成とその支援で求められる視点を、「手指の手型や運動など些細な変化を見落とさずに観察し、（中略）かつ関連するエピソード群も収集して検討し、子どものわかりかた（例えば、思考や情報処理など）を仮定できる。前述の「わかりかた」を踏まえた手指信号あるいは手話信号を提案し、かつ子どもに対する発信行動（係わり）を調整・実践することで、子どもとの手話を主とするコミュニケーション活動がより滞りなく展開する可能性が高くなる」と述べている。本稿で述べた、「家庭」「事業所・職場など」「友達」「ろう者コミュニティ」といった場におけるコミュニケーション手段を把握しながら、「日常的報告におけるコミュニケーション状況」や「不満や要望の率直な表明におけるコミュニケーション状況」での質問項目などを用いて、一人ひとりのろう重複児・者のコミュニケーションの実態を詳細に把握するスキルを有し、さらに、松崎（2017）が述べている、ろう重複児の手話を主とするコミュニケーションの形成とその支援についての視点を身につけた支援者がろう重複児・者支援の場では必要となるのではないだろうか。ある程度通じ合うコミュニケーションスキルを習得するのみならず、意図的に手話で高次の言語運用を図ることを意識したコミュニケーション支援スキルをもつ支援者育成が望まれよう。今後において、そのような支援者育成についての検討などが行われることが期待される。

注

1) 「視聴覚障害者情報提供施設」は身体障害者福祉法第三十四条で定められている施設である。聴覚障害者が利用する場合は「聴覚障害者情報提供施設」と呼ばれている。

付記

厚生労働省平成30年度障害者総合福祉推進事業「聴覚障害と他の障害を併せ持つためにコミュニケーションに困難を抱える障害児・者に対する支援の質の向上のための検討」の結果(調査B)を2020年度日本財団助成「学術手話通訳に対応した専門支援者の育成」事業として更に分析加筆しました。調査にご協力いただきましたご家族の皆様、厚生労働省平成30年度障害者総合福祉推進事業「聴覚障害と他の障害を併せ持つためにコミュニケーションに困難を抱える障害児・者に対する支援の質の向上のための検討」検討委員会の委員の皆様方に感謝の意を記します。

文献

二神麗子(2020)『なかま企画』実施の意義. 2019年度「学術手話通訳に対応した専門支援者の養成」事業シンポジウム報告書. 36-39.

国立大学法人群馬大学(2019)厚生労働省平成30年度障害者総合福祉推進事業「聴覚障害と他の障害を併せ持つためにコミュニケーションに困難を抱える障害児・者に対する支援の質の向上のための検討」成果報告書.

甲斐更紗・金澤貴之・二神麗子・吉村京子・木村素子(2020)ろう重複障害者へのコミュニケーション支援の実態について—相談支援専門員の手話スキルに関する視点からの

分析—. 群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編 69, 139-148.

金澤貴之(2008)聴覚への制約を中心とした重複障害への教育支援. 発達障害支援システム学研究 7(2), 89-96.

金澤貴之(2013)手話の社会学—教育現場への手話導入における当事者性をめぐって. 生活書院.

厚生労働省(2008)平成18年身体障害児・者実態調査結果. 2008年3月24日. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/shintai/06/index.html> (2020年8月25日閲覧).

永石晃(2007)重複聴覚障害をかかえる児童・青年期の人々とその家族への支援—子どもと家族への教育的・心理的支援の実践と展開—. 日本評論社.

牧原 功(2008)不満表明・改善要求における配慮行動. 群馬大学留学生センター論集 7, 51-60.

松崎 丈(2017)ろう重複障害児との手話を主とするコミュニケーション形成を目指した実践研究. 宮城教育大学紀要 52, 243-259.

社団法人埼玉聴覚障害者福祉会・全国ろう重複障害者施設連絡協議会(2013)ろう重複障害の支援に関する調査事業報告書—一人一人が輝く社会をめざして—.

多川則子・吉田俊和(2006)日常的コミュニケーションが恋愛関係に及ぼす影響. 社会心理学研究 22(2), 126-138.

武田篤・佐川透(2006)盲・聾・養護学校に在籍する聴覚障害重複児の実態調査. 聴覚言語障害 34(3), 83-91.

全国ろう重複障害者施設連絡協議会(2019)全国ろう重複障害者施設連絡協議会加盟施設一覧. 2019年6月.

<https://tukusi.org/pdf/zenrou2019-4.pdf> (2020年8月25日閲覧).

